

日本文学研究資料叢書

太宰治
II

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

太宰治 II

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

ISBN4-640-32501-0

太 宰 治 II

定価 3200 円

昭和60年9月25日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話 03(291)1521~3 番

振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN4-640-30081-6 C3393

『日本文学研究資料叢書』刊行に際して

日本文学の研究は、戦後三十数年を経て、再検討と新しい方法への模索が試みられ、転換期にあると言われております。そうした状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。

本叢書はそうした要請に答えて、日本文学研究の未来に賭けられた可能性のために刊行されたものです。今や、国文学界も、マス・コミュニケーションの時代は避けられず、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、その氾濫は真の学問的交流を阻害するようになっていくようにさえ見えます。尨大な著作・雑誌・紀要等々が刊行され、それらのうちには、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったように、種々の困難が、そうした錯綜の上に重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした時代の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本叢書は有効的な役割を果す決意で刊行されたものです。

本叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効的に提供することを目標としたものです。また現代の日本文学研究の動向が、本叢書によって総覧でき、今後の進路を導く羅針盤でありたいと希望しております。

日本文学の研究者、特に若い未来にのみ存在する研究者に、本叢書の趣旨が期待され、支援され、永続的な事業として継続される力を与えて下さるように願ってやみません。

目次

作家太宰治の誕生	山内祥史	一
— 筆名へ太宰治の意味について —		
「太宰治の方法」考	栗原敦	二
— 「純粹小説論」・「私小説論」の影 —		
太宰治論 — 中期を中心として —	渡部芳紀	三
太宰治の「単一表現」	鶴谷憲三	六
へもどきの方法 — 作者の出現と自滅 —	亀井秀雄	九
太宰治研究への一視点 — 〈物語〉の喪失と死 —	大久保典夫	一五
*		
太宰治初期文学態度の一検討 — 「葉」私論 —	石関善治郎	二〇
太宰治「列車」考 — 故郷に宛てた私信 —	越前谷宏	二四
自我という影絵 — 「彼は昔の彼ならず」論 —	服部康喜	二三
なぜ、大庭葉蔵か	笠原伸夫	二六
「狂言の神」あるいは言語の建築空間	関井光男	三〇

「虚構の春」の構成と背景……………小野正文…三〇

「満願」前後の問題……………村橋春洋…二〇

『富嶽百景』序章の重要性……………種茂勉…二五

「走れメロス」材源考……………角田旅人…二七

「津軽」について……………相馬正一…二八

『新釈諸国噺』論——「大力」「裸川」「義理」をめぐり……………小泉浩一郎…二九

「お伽草紙」の桃源境……………東郷克美…三〇

太宰治『お伽草紙』の表現構造……………森厚子…三六

——「語り」に関する方法論の試み——

*

水の神話——太宰治と水についての考察……………長谷川吉弘…三三

太宰治小論——〈神〉という名辞をめぐる……………佐藤泰正…三六

太宰治と伊藤整——大庭葉蔵と得能五郎……………鳥居邦朗…三六

太宰治と俳諧の精神……………小室善弘…三六

道化雲れの俳諧師——太宰治の俳句……………小室善弘…三七

太宰治と中国文学(一)……………鈴木二三雄…三九

——「魚服記」について——

太宰治と中国文学(二) 鈴木二三雄・六五

—「清貧譚」と「竹青」—

△資料翻刻▽ 津島家歴史 二七

*

解説 — 研究雑感 — 東郷克美・三〇

太宰治Ⅱ研究参考文献 東郷克美・三〇

執筆者一覧 三三

作家太宰治の誕生

——筆名〈太宰治〉の意味について——

山内祥史

「事物の命名は、認識のあとになってもたらされるのではなく、それはまさに認識そのものである。」——M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1965, p. 207.

—

筆名〈太宰治〉の意味については、すでに気ままなエッセイを書き、その時点での私見を提示してみたことがある。⁽¹⁾「筆名太宰治論私考」(『太宰治研究』第八号、昭和四十二年六月十九日発行)と題する拙稿だが、それを書いたのちに、種々の資料が目に入って、私見は急激な変化をきたすことになってしまった。いわば、「筆名太宰治論私考」に提示した仮説は、〈太宰治〉という言葉の周辺に偶然散らばっていた資料を、手軽に結びつけて、わたしが〈作りあげた〉恣意的な仮説にすぎなかったと、思うようになってきたのである。筆名〈太宰治〉の意味は、太宰治みずからがすでにあざやかに語っていたのであり、それは、資料の裡に完全なエクスボオネントとして発見されるものであったのだ。

筆名〈太宰治〉の意味は、筆名がまさしく太宰治によって決定さ

れたものであるかぎり、太宰治の筆名に対する意識によって規定されている。さらには、太宰治という存在によって、個性づけられ規定されているといえるであらう。いわば、かれが身を置く特殊な状況のなかで、おのれ自身を選ぶその選択に、厳密に規定されていると考えられる。したがって、筆名選択という偶然的にみえる些細な行為にも、この世界における太宰治自身の個性的具体的存在仕方の、全体を指示する象徴的意味があると、わたしには思われるのだ。かくして、筆名〈太宰治〉の底にひそむ、意味の核心に迫ることを企図すれば、まず、太宰治が語るところに注意深く耳を傾け、かれ固有の筆名に対する意識、ないし、公然と認める意図を考え、ほかならぬ太宰治自身にとって、筆名〈太宰治〉の意味するところはなんであったのか、そうした問題をさぐる必要であると思うのだ。わたしが、筆名についての私見を提示したとき、太宰治の筆名に対する意識を窺うにたる資料が、まったく目に入っていないかったことは、私見に当然ながらあきらかな限界をあたえている。だがその筆名論のおかげで、すぐれて貴重な二、三の資料にふれることができたのである。

二

とくに啓発されたものは、相馬正一氏が「太宰治について」(『自治会誌』第十二号、昭和三十八年十二月十八日発行)で引用された、女優関千恵子さんの「先生のペンネームの由来をお聴かせ下さい」という問いに対する、太宰治の談話である。

特別に、由来だなんて、ないんですよ。小説を書くとき、家の人に叱られるので、雑誌に発表する時本名の津島修治では、いけないんで、友だちが考へてくれたんですが、万葉集をめくつて、始め、柿本人麻呂から、柿本修治はどうかといふんですが、柿本修治は、どうもね。そのうち、太宰権帥大伴の何とかがつて云ふ人が、酒の歌を詠つてゐたので、酒が好きだから、これがいふつていふわけで、太宰。修治は、どちらも、おさめるで、二つはいらないといふので太宰治としたんです。

(昭和二十三年一月九日談、関千恵子「太宰治先生訪問記」)

「大映フアン」第二巻第四号、昭和二十三年五月一日発行

この談話を、私見の発表直後相馬正一氏に論考の抜刷を恵与されて読んだとき、わたしは、筆名の由来の核心をさぐりあてた気がしたものである。短い引用だが、これだけの談話にも、太宰治の筆名に対する意識が集約的に表現されていて、深くなにごとかを示唆するものがある。いな、この談話の深い示唆にしがたがえ、太宰治が、ついに筆名を「太宰治」とした理由がわかるであろう。太宰治の筆名に対する意識、その本性が圧縮されて秘められているように思えた。むろん、筆名使用開始後十五年も経過しているだけに、筆名考案時の切迫感はいささか、極度にくだけた通俗的な語り口になっていて、疑わしい点もある。だが、これはど筆名の意味解析の可能

性を秘めて、よく検証にたえる資料は、他にほとんど類例をみない。そしてこれは、私見によれば筆名「太宰治」の由来の本質を示すものにほかならない。

わたしは「筆名太宰治論私考」において、「太宰」はドイツ語 (Götter) をもじつたと同時に日本語「墮罪」をもじつたもので、「生れて、すみません」「罪、誕生の時刻に在り」などの句にみられる、いわゆる一種の原罪意識の現存在が、同時に墮罪であるという意味が、ふくまれているのではないかと考えたのだが、この臆断は、案に相違して右の談話ではまったくふれられていない。もしわたしが臆断した意味を意識して「太宰」としたのなら、ここで語られない理由とは、どういうものであろうか。この設問をするとき、右の談話は、わたしの筆名論との落差を、いみじくきわだたせている。いわばわたしの推定と、あざやかにちがった意識をみせているのである。

この談話で、まず注意すべきは、「小説を書くとき、家の者に叱られるので、雑誌に発表する時本名の津島修治では、いけない」という発言であろう。太宰治にとって、「小説を書く」ことは、「家の者に叱られる」行為、「家の者」の意志から離脱した行為であった。筆名の考案は、いわばその「家の者」の意志と、「小説を書く」ととのあいだの歪曲、断絶に由来しているのである。そこでかれは、二者択一への分裂を忌避し、「小説を書く」ことにむかつて自己を投企するのとはうらはらに、「家の者」の眼に対して、「小説を書く」自己を隠したいとねがう。「家の者」に隠蔽することによって「小説を書く」ことの安全を図らうとねがうのだが、そうねがえばねがうほど、かえってますます、「家の者」にその「気づかい」がむかわざるをえない。その「気づかい」が、筆名考案の動因になっ

たと、考えてよからう。しかし、この〈家の者〉に対する〈気づかい〉と、〈小説を書く〉ことへの投企とは、いわば楯の表裏の関係にある。楯の裏側からいえば、〈小説を書く〉ことへのあくなき〈執念〉こそ、筆名考案の動因になったといえるだろう。〈家の者〉に対する〈気づかい〉と、〈小説を書く〉ことへの投企とは、同時に交叉し合う求心的な渦巻であって、その中心には、〈小説を書く〉ことへの異様な〈執念〉があったのだ。いわば、〈小説を書く〉ことを選択するその選択に規定されて、渦巻は発生したのであり、太宰治がその選択を変えないでいるかぎり、その渦巻は必然に生起するものであったのだ。筆名の考案を思いついたとき、かれの心の核は、すでに、〈家の者〉の意志に背を向けて、〈小説を書く〉ことへとむかっている。背を向けて、〈小説を書く〉ことの裡に、のめりこんでいこうとしているのである。かくして、〈家の者〉に対する顧慮と〈小説を書く〉ことへの執着、このふたつが、まず、太宰治に筆名を考案させた、最大の動因であったということができよう。さて、そのあと、「柿本人麻呂↓柿本修治↓太宰権帥大伴の某↓酒の歌↓酒が好き↓太宰」と、筆名〈太宰〉を決定するにいたる経過が語られるのだが、この経過で注意すべきは、〈太宰権帥大伴の某〉以下の連想であろう。なるほど、「万葉集」巻三には、「太宰帥大伴卿讀酒歌十三首」の題詞のもとに、〈酒の歌〉が掲載されている。しかも、「酒の歌↓酒が好き↓太宰」と展開する連想の経過は、一見必然的である。だが、注意してみれば、その〈酒の歌〉は「大伴の何とかついていふ人」の作歌であって、〈太宰権帥〉とは直接必然的な関連はない。なぜ、〈柿本〉の場合と同様、〈大伴〉がとられず、官名〈太宰権帥〉の⁽³⁾〈太宰〉がとられたのか、その説明の過程は恣意的であって、判然としない。さらに、筆名を「考へてくれ

た」という「友だち」津久井信也氏⁽⁴⁾によれば、「万葉集をめくつて」云々という事実は、なかったといわれる。(昭和四十二年九月十五日付、山内宛書簡) かくして、〈太宰〉が選択されたのは、はたしてこれだけの理由であったのかという、疑惑をおさへたいのである。

三

ここでいまひとつ、太宰治の直話といわれるものを引用してみよう。それは杉森久英氏『苦惱の旗手太宰治』(文芸春秋、昭和四十二年六月二十五日発行)に紹介された、竹内俊吉氏の記憶である。

あるとき太宰は東京から、竹内にあてて、金を貸してほしいと、手紙で頼んで来た。田舎新聞記者の竹内からみると、太宰などは結構な御身分で、なぜ他人の懐をあてにしなければならぬか、わからない。しっかりしろと、ことわりの手紙を出すと、折り返し手紙で、ほんとうに困っている、五円だけあれば助かるのだから、頼むといつて来た。

そこで竹内は、それならいいことがある、ちょうど「東奥日報」で懸賞小説を募集しているから、それに応募するがいい、選者はおれだから、お前のを入選させてやろうと予約した。そのとき送って来たのが、「晩年」にはいつている短編「列車」であった。竹内はそのときはじめて、太宰治という署名を見た。

そのころ太宰施門氏が京大仏文科の教授をしておられて、雑誌などにいろいろな文章をのせていたが、こちらの太宰は東大仏文の学生であるし、竹内はてっきり、そこいらがこのペンネームの由来だろうと思った。

それで、次に会ったとき

「お前の太宰治というのは、太宰施門の真似だろう」

と聞いたところ、

「いや、僕のは天神様の太宰だ」

といった。彼はこのペンネームが気に入って

「活字にしてみると、案外いいなあ」

といった。それ以来、彼はこの号を用いた。

この、竹内氏の記憶について、真偽のほどを竹内氏に問いあわせるところ、つぎのような返信を貰った。

杉森久英氏の著書にある太宰の筆名に関することは、だいたい、その通りであります。とりたてて虚構というべき点はありません。ただ、太宰という姓を筆名の姓にした動機が何であつたかは、明らかではありません。太宰施門をマネたものでも、アヤかったものでもないことだけは、本人が否定していました。太宰府の太宰だといったことも事実だが、その地名をとったのだという意味かどうか確実ではありません。太宰治が当時、若干、文名が出ていた頃なので、郷里の新聞の懸賞作品に応募することには、多少、躊躇を感じたのであろう、それで、誰ともわからぬ筆名を『列車』につかったが、それが、彼の一生の文名になった——こういうことかと思ひます。

(昭和四十二年七月十七日付山内宛、原文のまま)

この竹内氏への直話はまた、興味ある問題を示唆している、と思われる。この直話によれば、筆名「太宰」は、「天神様の太宰」あるいは「太宰府の太宰」であつたということになる。「天神様」(太宰府)から、ただちに連想されるのは、いうまでもなく「菅原道真」である。つまり、この直話によれば、筆名「太宰」は、「大伴旅人」に由来するものではなく、「菅原道真」に由来すると、断ぜ

られるわけだ。

ところで、竹内俊吉氏に送付されたという短篇「列車」(「東奥日報」第一四五四一号、昭和八年一月十九日発行「乙種懸賞創作入選」欄)は、つぎのような一文からはじめられている。

一九二五年に梅鉢工場といふ所でこしらへられたC五一型のその機関車は、同じ工場と同じく製作された三等客車三輛と、食堂車二等客車、二等寝台車、各々一輛ずつと、はかに郵便車荷物車三輛と、都合九つの箱に、ざつと二百名からの旅客と十萬を越える通信とそれにはまつはる幾多の胸痛む物語とを載せ、雨の日も風の日も午後の二時半になれば、ピストンをはためかせて上野から青森へ向けて走つた。

(初出原文のまま)

この劈頭の一文に記された「梅鉢工場といふ所」に関し、長篠康一郎氏は「太宰治『晩年』試論」(「文学会議」第十七号、昭和四十四年八月発行)で、つぎのような注目すべき指摘をされた。

「太宰治」として登場した作品の『列車』は、なぜ、梅鉢工場で、こしらえる必要があつたのか。なぜ、「梅鉢」がえらばれたのであろうか。／＼(略)「梅鉢」とは、菅原公の家紋ではないか／＼(略)太宰権帥(だざいごんのそつ)に左遷され太宰府に流された菅原道真。故なく義絶を宣告され、故郷からも見離されて、さながら孤児(みななしこ)同然の身の上となった津島修治。さらに、この論を端緒とする続稿「太宰治の文学」(「西播文学」第四十八号、昭和四十六年十月十日発行)では、C五一型機関車の製造に関する、詳細な資料の検討をされ、その結果つぎのような結論を導きだされている。

(1) C五一型の製造年月と、作品「列車」に登場するC五一型の

機関車とを、直接結びつける（一九二五年に限定する）根拠はきわめて薄い。すなわち、作者が「一九二五年に」としたのは別に意図するところがあつたもので、この場合はC五一型の実際の製造年月に、さほどこだわっていないとみてよいだろう。

(2) 梅鉢工場に於ては機関車（SL, EL, DL）はつくられておらず、もとより一九二五年にC五一型の機関車が製造された事実はない。

この結論にいたる論証過程には、種々の疑点が指摘されるようである。しかし、いまはそれを措くとすれば、これは示唆に富む問題を孕んだ結論だと、いってよからう。しかも、この結論に基づいて、「一九二五年」は、太宰治が「蜷風楼」を創刊し「作家になろう」と志した思い出のとしであった」と、注意をうながしたことは、画期的であつた。

私見によれば、作品「列車」は、「作家にならう」というへひそかな願望⁽⁸⁾の、出発を象徴する作品であり、また、「一九二五年に梅鉢工場といふ所でこしらへられた」という「列車」は、そのへひそかな願望の、象徴としての意味をひきずつてゐる。「一九二五年からいままで、八年も経つてゐるが、その間にこの列車は幾万人の愛情を引き裂いたことか」という、劈頭を受ける一文には、「作家にならう」というへひそかな願望⁽⁹⁾が、多くの「愛情を引き裂いた」ことへの、尽きぬ感慨のひびきが、こもつてゐるように思われる。ともあれ、作品「列車」は、〈私〉が「ひどくからい目に遭はされた」「列車」の、在り様そのものを物語ろうとした作品であり、「つめたい雨の中で黒煙を吐きつゝ発車の時刻を待」つその「列車」は、作家〈太宰治〉の、出発のリズムを、息づいてゐるように思われる。荒涼たる気配がしのびよつてゐる時代の驕り、暗い青春の傷みとい

つたものを深く内に孕みながら、いまやまさに出発しようとする、作家太宰治の出発の息づきが、感じられるように思うのだ。

では、その「列車」が、「梅鉢工場といふ所でこしらへられた」というのは、どういうことなのか。それは、さしずめ、作家〈太宰治〉の誕生が、〈梅鉢〉に本質的に依存していることを意味するものである。しかし、この問題の検討に際しては、いまひとつの、太宰治の直話といわれるものを、みておく必要がある。

四

それは、「太宰治とその死」（『太宰治全集第10巻月報10』筑摩書房、昭和四十二年十二月二日発行）と題する対談で、阿部合成氏が木村彰一氏に紹介された、つぎのような直話である。

阿部 太宰の生家、あのへんの土地では、太宰治という名前は親不孝の代名詞みたいなものですよ。太宰というペンネームには「島流し」という意味があるんですよ。「申し分けなから自ら遠島流罪だ」

木村 それは、しっかりした根拠があるのですか。
阿部 ぼくに言つてましたよ。

木村 ペンネームについてはダダイズムとかドイツ語の Dadaism とかと結びつける説がある。

阿部 そうじゃない。彼の東北的な義さと、無頼さ。

木村 つまり、太宰府へ追放、そういう意味？

阿部 そこでなんとかやりますよ、という意味で「治」。

木村 「治」。これは面白いな。絶対信頼できる説だな。

阿部 そこで大将になれるつもりかと言つたら、「いや、そこまではいかん。」

（昭和四十二年十月三十日）

これはまた、注目に価する紹介である。さきの談話にみられた、「家の者」に対する顧慮と「小説を書く」ことへの執着という、太宰治に筆名を考案させたふたつの動因は、異様なレアリテをもって絡みあい、明確に息づいている。また、このふたつの動因の対立は、一挙に「小説を書く」ことへの執着という方向に収斂されて、あざやかな解決を現出している。さらには、作品「列車」の「梅鉢工場」といふ所でこしらへられた」という記述の意味も、いわば剝きだしに姿を現している、といつてよい。これらはすべておなじ次元からの発想であり、等質の陰影を帯びながら、作家「太宰治」の誕生の姿を伝えているように思われる。いわばこの直話には、まぎれもない太宰治自身の根深いコムプレックスが巣くっており、また、筆名「太宰治」の意味の本質が、あざやかに示唆されている、と思われるのだ。

太宰治は、「小説を書く」ことを選択するに際して、「家の者」のまなざしを強く意識した。「小説を書く」と、家の者に叱られるので、雑誌に発表する時、本名の津島修治では、いけない」というさきの談話は、これを端的に物語っていると考えられる。ところで、「家の者」のまなざしを意識することは、同時に、「家の者」のまなざしになることである。「家の者」となつて、おのれを見ることであり、「家の者」の視点から、自己を経験することである。したがって、「小説を書く」ことを選択するには、まず、「家の者」の視点から、「小説を書く」自己の存在可能を見出さなくてはならなかったはずだ。そのためには、「家の者」に対する証となるものが、ぜひとも必要であつたはずである。まことに「家の者」に対する顧慮こそが、太宰治に筆名を考案させたバックボーンであつたが、その顧慮が、真に内的衝迫に根ざした「感情状況」であれば、その当然の

帰結にふくまれる「感情の証」の表現について、細心の考慮を怠るものではない。「申し分けのないから自ら遠島流罪だ」は、「家の者」の意志から離脱した行為をする太宰治が、「家の者」の視点から、みずから向ける永遠の非難——「感情の証」の表現であらう。いわば、ひとつの可能性において在る太宰治が、「小説を書く」ことを選んで、「家の者」の意志を選ばない、という、「負い目」を語っていると考えられ、また、その「負い目」を、明瞭に意識しながら、かえってそれを本格的に背負っていく形態での、投企をしていることを物語っている、と考えられる。その投企によって、太宰治は、「家の者」に対する「気がかり」からのがれて、一挙に、「小説を書く」自己の存在可能を見出そうとしているのだ。「小説を書く」ことが、「家の者」の意志にそむく「罪」の道だとすれば、重ねきたった「罪」もろとも、それを負うことによつて、「小説を書く」自己の存在可能を見出そう。「小説を書く」ことを選択することによつて、課せられる裁きの罰を、みずからすすんであらかじめ受けることは、すでにこの「いま」において、「小説を書く」自己を実現することになるはずだ。裁きの罰を受けた自己は、すでに在るのだから。かくして、「配慮すべき事柄」は、すでに解決済みの事柄」とされ、自己はまったく「わすらわれないもの」の位置におかれているのである。要するに、「小説を書く」自己の存在可能は、「家の者」の視点からみずから向ける非難——「証」の表現によつて見出されたのだ、といつてよからう。換言すれば、「作家にならう」という「ひそかな願望」は、「自ら、遠島流罪」とすることに、よつて、はじめて真の出発をすることができたのである。これがいわば、作品「列車」で、「列車」が、「梅鉢工場」といふ所でこしらへられた」と記された由縁だと思われる。かくして「太宰」は、「太宰権帥」

〈天神様〉〈太宰府〉に、さらには〈梅鉢〉にも関連し、〈菅原道真〉のイマアジユとむすびつくのである。

ところで、〈菅原道真〉のイマアジユは、異なった、ふたつの側面をもっている。ひとつは〈左遷流罪〉、いまひとつは〈文学の神〉という、側面である。このうちの、〈文学の神〉という側面は、わたしがさきに「筆名太宰治論私考」で論証した、〈太宰治〉という漢字自体のもつ意味——「作家太宰治に即していえば、あらゆる文学者の長となって文学界を統治する」という意味と、あるいは照応するのもかも知れない、と思われる。だが、阿部合成氏が紹介する太宰治の直話によれば、私見の意味はあきらかに疎外されている。「そこで大将になれるつもりかと言ったら、『いや、そこまではいかん』、と。太宰治に、もし、〈文学の神〉にあやかろう、という意識があったとしても、それは、〈小説を書く〉ことへのあくなき執念」をこそ、物語るものだろう。筆名を「考へてくれた」という「友だち」津久井信也氏によって提示された〈太宰〉の語から、太宰治が〈太宰権帥〉〈太宰府〉〈菅原道真〉などを連想した真意、その意味志向（表現意図）の根本は、やはり、〈文学の神〉ではなく、〈左遷流罪〉であったと思われる。そのなによりの証左となるのが、さきの関千恵子さんへの談話である。筆名〈太宰〉の由来は、たとえば〈大伴旅人〉でもよく、必ずしも〈菅原道真〉に限定される必要はないのだ。〈菅原道真〉に、典型的にあらわれてはいるが、必ずしもそれに限定される必要はない、〈太宰権帥—左遷流罪〉のイマアジユこそ、筆名〈太宰治〉の意味指向の根本であったといっている。その意味で、阿部合成氏の紹介する直話は、きわめて現実的で、まさしく筆名〈太宰治〉の意味の本質を、あざやかに示唆していると思うのである。

事実、阿部合成氏の紹介する「申し分けないから自ら遠島流罪だ」という言葉には、まぎれもない太宰治の個人的経験が息づいている、と思われる。すでに、「家郷追放、勘当除籍」（「虚構の春」という裁きを受けていた故郷喪失者太宰治の、刻々に不安と決断とに迫られていたその在り方が、深くあざやかに示されているように思われるのだ。〈家の者〉に対する顧慮と、〈小説を書く〉ことへの執着、その間の不断の緊張の裡を生きた太宰治。そのかれが、〈小説を書く〉ことを選んで、〈家の者〉の意志を選ばないという決断をするに際して、〈家の者〉に対する不都合を自発的に解除しようとした、いわばその現実的な対策、現実的な処方箋が筆名であったという事態には、異様にたしかな現実性がある。しかも、この「申し分けないから自ら遠島流罪だ」という自己否定は、故郷喪失者太宰治の、無頼・反抗の気をはらみ、さらには、痛切な〈故郷〉への思慕、あの遠く深い生成の根源への思慕に、みだされている。これはすぐれて太宰治的な意識であり、いわば限なく太宰治の刻印を押された世界である。かくして、太宰治が語る談話や直話に、影のようにつねにつきまとっている〈太宰権帥—太宰府〉のイマアジユは、〈流罪〉の語とこそ、ぬきがたく密接にむすびついている、と思われのだ。

五

〈太宰〉と〈流罪〉の語は、意味の上からだけではなく、音声の上からも、ぬきがたく密接にむすびついている。語尾 zai は、まったく同じであり、語頭の p と b も、調音点が同じであって、ともに舌先を上歯茎付近につけて発音される。しかも、この d 音と r 音とは、発聲音がきわめて近く、しばしば混同して使用されている。

とくに語頭にd音r音があるとき、その混同はげしいように見受けられる。この現象は、究極的に、〈太宰〉と〈流罪〉の語の連関が密接であること、その内面的性格が同一であることを、暗示しているように思われる。精神分析学によれば、このd音とr音とは、無意識の裡で転化しうる音、〈同一視 Identifizierung〉されうる音である、という。つまり、〈太宰〉と〈流罪〉とは、同一語であって、〈太宰〉は確実に〈流罪〉の変容したものだ、ということになるのである。たとえ太宰治自身の意図はどうであつたとしても、筆名〈太宰〉の本質は、〈流罪〉であつたということになるのだ。これはすぐれた、証驗となしうるものだろう。〈太宰〉の語自体の存在の核心は、まさしく〈流罪〉の語との共鳴のうちにこそ見出されるのだ、といってよからう。

かくして、〈流罪〉の語こそ、筆名〈太宰治〉の根底にひそむ意味の核心であり、さらには、筆名〈太宰治〉創造の根源であつたと思うのだ。太宰治の心底にあつて、無限の陰影にみちて揺れ動く〈流罪〉の語こそ、作家〈太宰治〉誕生の母体であつたと思うのである。

注

(1) 筆名〈太宰治〉の由来に関する、従来の諸説については、拙稿「筆名『太宰治』」(『太宰治辞典』清水弘文堂、昭和四十七年六月二十日発行)を参照されたい。なお、参考までに、そこで紹介した諸説の出版を明示しておく、つぎようになる。

1 井伏鱒二「『太宰治』」(『文芸雑誌』第一年第四号、昭和十一年四月一日発行)、井伏鱒二「解説」(『太宰治集上巻』新潮社、昭和二十四年十月三十一日発行)

2 関千恵子「太宰治先生訪問記」(『大映ファン』第二巻第四号、昭和

二十三年五月一日発行)

3 相馬正一「『太宰治について』」(『自治会誌』第十二号、昭和三十八年十二月十八日発行)、結城亮一「『太宰治』という筆名」(『山形新聞』第二九五三九号、昭和四十二年六月十八日)、相馬正一「筆名の由来」(『太宰治(中)』弘前市立弘前図書館、昭和四十四年三月三十一日発行)

4 関良一「富嶽百景」(『私の現代国語教室』大修館書店、昭和四十一年四月一日発行)

5 拙稿「筆名太宰治論私考」(『太宰治研究』第八号、昭和四十二年六月十九日発行)

6 杉森久英「苦悩の旗手太宰治」(『文芸春秋』昭和四十二年六月二十五日発行)

7 阿部合成、木村彰一「対談太宰治とその死」(『太宰治全集第10巻月報10』筑摩書房、昭和四十二年十二月二日発行)

8 長篠康一郎「『太宰治』晩年」試論」(『文学会議』第十七号、昭和四十四年八月発行)、長篠康一郎「太宰治の文学」(『西播文学』第四十八号、昭和四十六年十月十日発行)

9 相馬正一「筆名の由来」(前掲書)、相馬正一「太宰治とその時代 93 94」(『陸奥新報』第八八七四号、昭和四十七年三月七日発行、第八八八一号、昭和四十七年三月十四日発行)

なお、1に対する私見は、「筆名太宰治論私考」(『太宰治研究』第八号、昭和四十二年六月十九日発行)と「筆名『太宰治』と津軽弁」(『解釈』第一四巻第七号、昭和四十三年七月一日発行)とに、4に対する私見は「筆名太宰治論私考」に、9に対する私見は「筆名『太宰治』と Dadaïsme」(『太宰治全集第7巻月報8』筑摩書房、昭和四十二年十月三日発行)に、それぞれ披瀝しておいた。また、3の結城亮一氏「太宰治」という筆名は、拙稿「筆名太宰治論私考」の私見に対する、反論の形をとられている。したがって

て、これに應える責を感じるのだが、昭和四十二、三年に結城氏説の資料的背景を調査した結果、種々の事情がからんで、その反証となる資料の発表が困難であることをさとした。結城氏におわびの意を表しておきたい。

(2) この「太宰治先生訪問記」の所載誌は、相馬正一氏によれば、「恐らく大映関係の写真画報」の類で、僕の所にはその箇所だけのコピー（二頁分）が残っています。そのままのコピーですから間違いはないわけですが、誌名も、従って発行年月日も不明です。（昭和四十三年二月二十四日付山内宛）とのことであり、また、関千恵子さんによれば、「大映ファン」と云う映画雑誌を、大映で発行してをりましたから、多分それだと思われまします。（昭和四十三年十月十五日付山内宛）とのことであった。その後それらの教示によって探索し、その所載誌をやっと入手することができた。

(3) 長谷章久「太宰府考（上）」（国文学）第七巻第十号、昭和三十七年八月一日発行）によれば、「権帥」は「臨時に命ぜられるかりそめの官に過ぎなかった」という。が、たとえ「令外の官」であろうと、「官」の「名称」であるにはちがいないだろう。

(4) 石上玄一郎氏書簡（昭和四十二年七月二十五日付山内宛、太宰友次郎氏書簡（昭和四十二年八月九日付山内宛、津久井信也氏書簡（昭和四十二年八月二十九日付、同九月十五日付、同十一月二日付、昭和四十三年一月一日付山内宛、白取貞次郎氏書簡（昭和四十二年九月十一日付山内宛、保坂虎雄氏書簡（昭和四十二年九月十四日付山内宛）等、旧制弘高出身諸氏の証言によって、この筆名を「考へてくれた」という「友だち」は、津久井信也氏であると判断される。なお、津久井信也氏からは、筆名考案時の状況に関して、詳細にわたる教示をいただいた。記して謝意を表する。

(5) この「万葉集をめくって」云々の話も、まったくの作り話であるとは思われない。すくなくとも、太宰治自身は、筆名考案時に「万葉

集」をめくって、「太宰帥大伴卿讃酒歌」を発見したものと思われ、それが、〈太宰〉を選択する理由の一端には、なったと思われる。

(6) 短篇「列車」の懸賞応募の状況に関しては、竹内俊吉「断片」（月刊読物）第一巻第六号、昭和二十三年九月一日発行、工藤孝志男「サンデー東奥時代」（郷土作家研究）第八号、昭和四十五年九月一日発行、今官一「晩年」書誌補筆（日本文学全集月報10）集英社、昭和四十七年三月八日発行）等を参照のこと。なお、筆名〈太宰治〉が最初に現れるのは、昭和八年二月一日発行「海豹通信」第二便の「消息欄」である。そこには「☆太宰治氏——創作「魚服記」脱稿」と記されている。また、太宰治の筆名で最初に発表された文章は、同月十五日発行「海豹通信」第四便の「故郷の話（Ⅲ）」の「田舎者」である。通常太宰治の名で最初に発表されたといわれている「列車」は、同月十九日付「東奥日報」日曜付録紙「サンデー東奥」に掲載されたもので、太宰治の名による最初の〈小説〉である。ところで、「西北新報」昭和八年一月一日付には、「郷土文壇」と題する文章が、津島修治の名で発表されているから、筆名〈太宰治〉決定の時点は、昭和八年一月二日から一月末日までの間と、断ぜられる。さらに、私見によれば、同年一月三日に決定されたものと断ぜられるのだが、これはまだ推測の域を出ない。

(7) この「梅鉢工場」に関しては、列車関係の研究家和田康雄氏から、吉村桐氏を通して詳細にわたる教示（昭和四十五年一月二十二日付吉村桐氏宛書簡）をいただいた。記して和久田、吉村両氏に謝意を表する。

(8) 「思ひ出／＼章」（海豹）昭和八年六月号）を参照のこと。

(9) 太宰治年譜の、昭和七年末にいたるまでの項を、参照のこと。なかでも、筆名〈太宰治〉決定直前の、半か年の出来事を念頭におくとき、「申し分ないから自ら遠島流罪だ」の言葉は、強烈な効果を帯びて迫ってくるように思われる。以下は拙稿「年譜」（講談社文庫）

の、「昭和七年」から「昭和八年」一月までの一節である。

昭和七年 一九三二年 二十三歳 三月、淀橋柏木に、四月、新富町の相馬アパートに、五月、八丁堀にと転居し、六月には、八丁堀をひき払い転々とした。党の指令による転居とは無関係な、不安と恐怖による転居もあったという。六月、忽然と警察の監視網から姿を消して行方が知れず、特高警察は生家を連日訪問、協力を懇請した。当時、保守系有力県議であった長兄は憤り、即刻送金を停止、運動離脱の誓約を迫った。七月中旬、極秘裡に青森の豊田家で母、長兄と会談、翌日長兄に伴われ青森警察署に出頭、二、三日(？)留置されたまま取調べを受け、党活動との絶縁を誓約して帰京した。取調べの結果、起訴され書類送検となったが、それは一応の形式上の手続きにすぎなかったといわれる。七月末、初代と共に沼津に行き、創作に専念。九月、芝白金三光町に住み、創作を続けた。十二月、青森検事局に出頭を命じられ、左翼運動との絶縁を誓約し、事後処理一切を長兄に託して釈放され、以後この問題から完全に離脱した。

昭和八年 一九三三年 二十四歳 一月、太宰治の筆名を決定し、やがて同人誌「海豹」に参加。
なお、「負い目」と「罪」との問題は、また別の論題を形成する。

(10) Medard Boss が *Psychoanalyse und Daseinsanalyse* (Verlag Hans Huber, 1957) によって、*ふたつの Einspringende Fürsorge* である。

(11) この「文学の神」に関する意見は、石上玄一郎氏の示唆(昭和四十二年七月二十五日付筆者宛書簡)に基づいている。記して、謝意を表す。

(12) 「家の考」に背を向けて、「小説を書く」世界に没頭する状態は、まさしく「執拗なる業」(「もの思ふ草——Alles oder Nichts——」)に基づいていると考えられる。この「執念」にみられる欲望は、究極

的には、「神」たうとする欲望であったといえるかもしれない。しかし、太宰治が、「太宰権助」「太宰府」「菅原道真」などを連想した真意、意味指向(表現意図)の根本は、やはり、「文学の神」ではなく、「左遷流罪」であったと思われる。

(13) 長谷章久「太宰府考(上)」(「国文学」第七巻第十号、昭和三十七年八月一日発行)によれば、「横佩右大臣豊成(天平宝字元年)、右大臣菅原道真(昌泰四年、左大臣源高明(安和二年)、内大臣藤原伊周(長徳二年)等の流謫によって明らかなる如く、大臣以上の人物が左遷されたとき、この名称を与えるのが常だった」という。

(14) 昭和五年十一月十九日、津島家から正式に分家除籍された。

(15) Henri Ey: *La Conscience* (Presses Universitaires de France, 1968) によれば、発生しつつある状態での意識の「原初経験」は、欲求と対象との間に介在する、障害物の抵抗の衝撃から生ずる。欲求と実在との間に、欲求のレリアを象徴する心像が生ずるのである。
(16) なお、この「家の考」に対する「語り」は、通常「語り」の対極にあるとされる。「沈黙」にちかづいている。「沈黙」をもうちにふくむ、もっと深いむすびつきへの志向が、看取されるように思われる。筆名の問題も、まさしく「家」の問題に収斂するとき、異常な現実性をおびてくる、一例証といってもよからう。

(17) この精神分析学における見解は、水谷昭夫氏の示唆に基づいている。記して、謝意を表す。

(「神戸女学院大学論集」第三二巻第一号、昭和五〇年九月発行)